

甦る推理雑誌⑧

エロティック・傑作選
ミステリー

ミステリー文学資料館・編

KOBUNSHA BUNKO



光文社文庫

よみがえ すいり ざつし
甦る推理雑誌[8]

「エロティック・ミステリー」傑作選

編 者 ミステリー文学資料館

2003年9月20日 初版1刷発行

発行者 八 木 沢 一 寿
印刷 慶 昌 堂 印 刷
製 本 榎 本 製 本

発行所 株式会社 光 文 社
〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6
電話 (03)5395-8149 編集部
8114 販売部
8125 業務部
振替 00160-3-115347

© Mystery Bungaku Shiryōkan 2003

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-73554-1 Printed in Japan

[R]本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

JASRAC 出0310608-301

光文社文庫

「エロティック・ミステリー」傑作選

甦る推理雑誌[8]

ミステリー文学資料館編



光 文 社

まえがき

ミステリー文学資料館では、「幻の探偵雑誌」(全十巻)に続くシリーズとして、「甦る推理雑誌」(全十巻)を企画いたしました。今回のシリーズでは、昭和二十年代に相次ぎ創刊された推理雑誌群を総覧します。

戦後混乱期の推理小説専門誌は、用紙不足に悩まされながらも、多くの佳作を生み出しております。戦前作家の活躍と新人作家の台頭、密室物などの本格推理、名探偵物などが多く輩出されました。「探偵小説」から「推理小説」へと呼び名が変わる、日本ミステリー界の変動期であり、いまでは幻となってしまうた作家、作品も数多く収載されています。また、その雑誌群は、猥雑な雰囲気漂わせながら、当時の社会状況を伝えるものもあります。そうした魅力に満ちた雑誌のエッセンスを、索引、総目次を充実させて刊行してまいります。

「エロティック・ミステリー」が独立した雑誌として創刊されたのは昭和三十五(一九六〇)年でした。しかし、そのルーツは昭和二十七年に発行された「宝石」増刊にまで遡ります。この雑誌の特色は、戦前派から新鋭まで、多彩な作品の再録にありました。誌名が示すとおり「性」に関する読物に力を入れた時期もあります。第八巻『「エロティック・ミステリー」傑作選』は、昭和三十年代後半、ミステリーに賭けた作家たちの情熱溢れる作品を集めました。存分にお楽しみください。

〔ミステリー文学資料館〕

目次

まえがき ミステリー文学資料館 3

独特の編集が異色作を生んだ「エロティック・ミステリー」 山前讓やままえ ゆずる 7

「エロティック・ミステリー」

喪妻記 福田鮭二 13

いたずらな妖精 縄田厚 63

キャッチ・フレーズ 藤原幸（藤原幸太郎） 105

怪物 島久平 133

葦のなかの犯罪 宮原龍雄 161

湖畔の死 後藤幸次郎 185

破れた生簀いけす 田中万三記 209

湯紋 楠田匡介 231

疑似性健忘症 来栖阿佐子 255

私は離さない 会津史郎 279

童子女うない松原 鈴木五郎 301

静かなる復讐 千葉淳平 331

走る「密室」で 渡島太郎 355

ライバルの死 有村智賀志 391

青田師の事件 土井稔 427

『「エロティック・ミステリー」傑作選』への招待
川田弥一郎かわだ やいちろう 467

太平洋戦争終結後十年の推理小説界と世相

474

「エロティック・ミステリー」

「エロチック・ミステリー」 「ミステリー」 総目次

476

「エロティック・ミステリー」

「エロチック・ミステリー」 「ミステリー」 作者別作品リスト

530

独特の編集が異色作を生んだ「エロティック・ミステリー」

やままえ ゆずる
山前 譲

(推理小説研究家)

独立した雑誌として創刊されたのは一九六〇（昭和三十五）年八月だが、そのルーツとなる「宝石」増刊の「エロチック・ミステリー20人集」は、五二年十月に発行された。四六年に創刊された「宝石」は、本誌のほかにさまざまな増刊を出していたが、「エロチック・ミステリー」もそのひとつで、「エロティック・スリラー」「エロティック・サスペンス」などの名称も用いて、五三年に一冊、五四年に二冊、五五年と五六年に各三冊、そして五七年には四冊出されている。内容はほとんど再録で、戦前派から新鋭まで、多彩なラインナップによる、エロティシズムをキー・ワードとしたアンソロジーだった。その編集はなかなか好評で、ときには本誌よりも多く売れたという。

五八年には、「宝石」増刊で三冊出たのち、「別冊宝石」のエロティック・ミステリー特集として出されていた。随筆を増やし、江戸川乱歩作品の再録、捕物帳、ミステリー作家以外のミステリアスな短編、あるいは時代小説と、誌面が刷新されている。五九年から六〇年にかけて隔月ペースで出されたことから、その好評ぶりが窺えるだろう。そして六〇年八月、いよ

いよ月刊誌「エロティック・ミステリー」として独立した。

創刊号を飾った作家のなかには、藤原審爾^{しんじ}、東郷青児^{せいじ}、大林清らがいる。いずれも再録作品だが、青光二の新作長編『殺人契約』の連載もあり、ミステリー専門誌としては異色の内容だった。その後も、南条範夫、田村泰次郎^{たいじろう}、中山あい子、今井達夫、今官一らが登場している。六一年には、当時のミステリー・ブームを支えた、佐野洋や樹下太郎^{きのした}といった新鋭作家の作品も掲載されるようになったが、やはりそのほとんどは再録であった。毎号のように目次を飾っている江戸川乱歩、大下宇陀児^{うたに}、島田一男らの作品も再録である。一方、読物はしだいに性犯罪、あるいは性科学に関係したものが多くなっていく。編集に携わった真野律太が「新青年」の元編集者だったため、随筆ではベテラン編集者の想い出が貴重だった。六二年からはふたたび小説中心となり、香山滋^{かやましげる}の長編『ペット・シヨップ・R』の連載のほか、「宝石」の新人賞に入選した作家の新作短編が掲載されるようになった。また、旅行記事が増えている。六二年六月には大幅な誌面刷新があった。A5判からB5判にサイズを大きくし、「エロチック・ミステリー」と雑誌名を変えている。編集の核となったのは、旅と推理小説である。レジャーとしての旅に注目したのだ。小説では、戦後まもなくに活躍した作家と「宝石」出身の新鋭が中心となった。日影丈吉^{ひようさきち}『現代忍者考』の連載、城昌幸^{じょうまさゆき}の時代小説、島田一男や高木彬光^{あきみつ}らの随筆と、目次は賑やかである。

しかし、それも長続きはしなかった。六三年からは高橋鐵の性風俗読物が巻頭を飾るようになる。しだいに旅関連の記事は姿を消していく。エロティックな記事が再び強調されだしたが、

小説は新人を積極的に起用したので、個性的な作品が並んでいる。六四年二月からはさらに「ミステリー」と誌名を変えたものの、内容的には変わっていない。そして五月、発行元の宝石社の倒産によって廃刊となった。

小説は当初、再録ばかりだったが、途中からは新人が目立っている。短い作品ばかりであり、雑誌名を意識しすぎたものもある。けれど、新人にとつては貴重な発表の場だった。本書にはそうした新人の作品が多く収録されている。また、楠田匡介ら懐かしい作家も登場していた。かつてないミステリー・ブームのなかで、異彩を放っていたのが「エロティック・ミステリー」だった。

【エロティック・ミステリー】

喪妻記

十

福田鮭二

福田 鮭二（ふくだ・けいじ）

経歴不詳。一九五八（昭和三十三年）、「静かなる復讐」が短編懸賞の候補となつて「寶石」に掲載される。六〇年にも「海鳴り」で宝石賞の候補となり、六一年には「抒情の殺人」で宝石賞の佳作となつた。さらに翌年にも「炎のうた」が候補となるが、入選には至らず、発表した短編は合わせて十編に満たない。

「エロティック・ミステリー」に発表した短編には、「喪妻記」のほかに「山の麓の歌」がある。

江口善太郎の左手の小指は、ウインナソーセージの尖端のように第二関節からちぎれている。それでも彼は、指をつめた博徒でも香具師でもない。P大学経済学部けいぎくぶの助教授で、専攻は会計学。「棚卸評価の諸問題」と題する著書をもっている。

小指の傷は、太平洋戦争に応召し、陸軍二等兵のときにうけた傷痕であった。この傷痕が戦後十六年経っても残っているのは当然だが、昨年あたりから冬になつて冷えこんでくると、腰部に疼痛をおぼえるようになった。四十代の後半という年齢としのせいかとも思ったが、ふと患部は、兵隊時代に、下士官に棍棒ではげしく殴打された箇所であることに気がついた。

最近、戦後は終つたという言葉を見たり聞いたりするが、江口善太郎の場合、腰部の疼痛が治り、ちぎれた小指が新しく生え変らないかぎり、戦争とその前後の不愉快な記憶から逃れることはできない。

善太郎は現在、東京西方の郊外に住んでいる。高校一年生の一人娘の杏子きょうこの発育はつよくぶりは驚くべきほどで、ついこの間まで父親と入浴を共にしていたが、最近、巧妙にこれを拒否してきた。